

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11789

研究課題名(和文)統合失調症患者が健やかに生きるための地域力の構築

研究課題名(英文)Building community support for patients with schizophrenia to live a health life

研究代表者

水野 恵理子(MIZUNO, Eriko)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：40327979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：地域住民の交流・連帯への介入がスティグマに及ぼす影響、台湾・香港・シンガポールの文化、生活習慣、民族性、家制度、保健医療福祉制度が精神医療福祉に色濃く反映していることがわかった。個別面接の内容分析の結果、外来通院中の統合失調症患者は、健常者との間にある壁、自分に対する周囲の視線を常に感じ、一般住民は昔ながらの精神医療の印象をもち、精神疾患は真に理解することはできない病気と考えていた。精神医療福祉専門職は業務の一つとわりきった姿勢をもつ傾向と精神疾患を理解することの限界を抱えていた。また、この3者間でのスティグマ平均総合得点に有意差は認められなかった。

研究成果の概要(英文)：We found that the culture, lifestyle, ethnicity, family systems, and medical welfare systems of each country, Taiwan, Hong Kong, Singapore, were heavily reflected in mental health and welfare. The results of a qualitative analysis revealed that the patients placed an emphasis on maintaining their status quo, while experiencing the influence of mass media coverage on the general public, the barrier between healthy people and those with mental health concerns. The general public held certain impressions about conventional mental healthcare, but considered mental disorders to be an illness that cannot be truly understood. Mental health professionals considered it a part of their jobs and they recognized the limitations in understanding mental disorders. The results of the statistical analysis of the scale scores revealed that there was no significant difference among patients, the general public, and professionals in the average overall score on stigma.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：統合失調症 スティグマ 地域力 健やかに生きる

1. 研究開始当初の背景

精神疾患を病む人の生活の質を維持・向上する上では、治療の継続、社会参加、精神的安寧の保持、人々との交流が必要であるが、これらを困難にしている一因に、精神疾患・障害の偏見とスティグマ(烙印)がある。先行研究より、統合失調症患者の生活は回復しているにも関わらずスティグマに満ちており¹⁾、深刻な社会的排除との関連²⁾を言及したものがあつた。また、統合失調症は対人関係の病といわれるように、人々との関係の質が彼らの暮らしに反映する。人々とのつながりから生まれるソーシャル・キャピタル(地域力)を構成する要素は、信頼、互酬性、ネットワークである。これらは、精神疾患・障害をもつ者が社会の中で主体的に生きる意思を育む上で重要である。

平成 24~26 年度基盤研究(C)「統合失調症患者の主体的回復を育む援助プログラムの構築」では、患者は一市民であることを切望していたが、偏見由来の自己卑下感、回復支援に消極的な精神科看護師の姿勢、臨床現場での偏見やスティグマを議論する機会の欠如が浮き彫りになった。疾患と障害を併せもつ統合失調症の治療・看護と社会との関係は常にある。そこで今回、スティグマとソーシャル・キャピタルの関係を明らかにし、統合失調症患者と家族が健やかに生きることを支えるための地域精神看護のあり方を検討することを目的とした。これは、人は人の中で生きていくという根幹と生きることを支える地域力の意味を考察することとなり、ノーマライゼーション醸成の一助になる点で意義があると考えた。

2. 研究の目的

統合失調症患者のスティグマがソーシャル・キャピタルにどのような影響を及ぼすのかを明らかにし、彼らが健やかに生きることを支えるための地域精神看護のあり方の示唆を得る。

3. 研究の方法

(1) 文献検討

統合失調症、精神障害、ノーマライゼーション、スティグマ、ソーシャル・キャピタル、社会参加をキーワードとした先行研究の検討、イタリア・シンガポール・香港・台湾の文化、医療制度、精神医療福祉に関する文献検討を行った。

(2) 海外の精神障害者支援施設の視察と情報交換

香港:友樂坊黃大仙、Juston Mental Health Support Service、台湾:台北市康復之友協會、咖啡坊、佳安康復之家、清新坊長青關懷中心、善導寺咖啡坊、孫媽媽工作坊、シンガポール:Institute of Mental Health Singapore (Stepping Stones Rehabilitation Service、Addiction Unit、Wellness Centre)、Hougang Care Centre、Yishun Community

Rehabilitation and Support Service, Simei Care Centre, Employment Support Services, National University of Singapore Alice Lee Centre for Nursing Studies Research 各施設スタッフと利用者への聞き取り又は座談会を通して、施設の位置づけや機能、スタッフの役割、地域住民との関係、精神医療福祉の課題に関する情報を得た。

(3) 国内の個別面接調査

上記(1)と(2)の結果をもとに、研究分担者と面接ガイドを作成した。研究代表者の所属機関倫理委員会の承認を得た後、山梨県:峡西病院、就労継続支援 B 型事業所ココット、松の実作業所、中央市社会福祉協議会、日本ダウン症協会山梨県支部芝草の会、長野県:駒ヶ根病院、飯田病院、就労支援施設紙ふうせん、障害福祉サービス事業所いずみの家、南信地域生活支援センター、子育て支援事業、各々より面接調査実施の承諾を得た。

個別面接調査 A.精神科病院に外来通院中の統合失調症患者 27 名:Link スティグマ尺度日本語版、面接ガイド(現在の生活でコンプレックスや劣等感を感じる、病気を抱えることで諦めたこと等)、B.精神科病棟・デイケア・地域活動支援センターの看護師・臨床心理士・精神保健福祉士・指導員 34 名:Link スティグマ尺度日本語版、ソーシャル・キャピタル質問紙(他人への信頼、地域での活動状況等 11 項目)、面接ガイド(一般的に精神疾患はどう捉えられているか、精神疾患をもつ人にとって難しいこと等)、C.一般の人々として、社会福祉協議会・ダウン症の子の親の会(芝草の会)・子育て支援事業のボランティアと会員 28 名:Link スティグマ尺度日本語版、ソーシャル・キャピタル質問紙、面接ガイド(一般的に精神疾患はどう捉えられているか、精神疾患をもつ人にとって難しいこと等)

(4) 分析、成果発表

文献検討のまとめ、面接の質的分析、尺度得点の解析結果を、国内外の精神保健看護学領域の学会、学術誌に発表した。尚、分析結果の一部は、2018 年開催の学会で発表予定。

4. 研究成果

(1) 文献検討の結果

2000~2015 年の CiNii での検索で抽出した主な論文数は、統合失調症・スティグマ・偏見で 51 編、スティグマ・障害者・精神障害・ソーシャル・キャピタルで 7 編、アジア・ソーシャル・キャピタルで 23 編であった。

ソーシャル・キャピタル:欧米諸国では、ネットワークや信頼性に着目したソーシャル・キャピタルの分析に関する研究が多数あり、ソーシャル・キャピタルの測定は、個人から組織、コミュニティ、都市、州、国まで幅広いが、信頼性・妥当性のある指標の作成には至っていなかった。欧米に比してアジア諸国のソーシャル・キャピタルのエビデンスは少なく、日本では、病者・障害者・高齢者

が住み慣れた場で健康的な生活を送るための一資源としてソーシャル・サポートが注目されている。

統合失調症、スティグマ:統合失調症のスティグマと偏見に関して直接論じたもの9編、精神障害者とスティグマ・偏見及び地域生活支援に関するもの11編を整理した。その結果、住民の交流と連帯への介入がスティグマに及ぼす影響を明らかにすることが、精神障害者の社会的包摂促進の上で重要であること、精神障害者の生活報道の欠落がメディア・リテラシーにとっての根本的な問題であること、精神医療従事者がもつスティグマの問題、家族のスティグマ認知が軽減するための心理社会的支援の構築、精神疾患に対する肯定的な態度を捉えるための尺度開発が課題であることが明らかになった。

(2) 海外の精神障害者支援施設の視察結果
香港と台湾は、精神障害者の処遇の歴史や、精神疾患・精神障害者に対して人々から否定的な言動が向けられていた点は日本と同様であるが、昨今は徐々に緩和されつつある。精神障害者支援施設のスタッフは、施設利用者(患者)が住民と積極的に交流する機会をつくること、新しい体験へ一歩踏み出す勇気を後押しすること、自信を持たせる体験を積み重ねることを心がけていた。また、政府関係者の精神医療福祉や精神障害者に対する見方の改善の必要性和医療費配分の増大を課題として挙げていた。シンガポールは、多民族で構成されているため、入院治療プログラムは様々な言語、宗教に沿ったものが用意されていた。地域精神医療福祉サービスが本格的に取り組みられるようになったのは2007年からであり、宗教団体を母体とした組織が精神障害者の地域生活を支えている点は特徴的であった。また、精神医療福祉サービスの体系について、香港とシンガポールは英国の、台湾は日本の影響を受けている部分があった。

(3) 国内の個別面接調査の分析結果

本研究のキーワードであるソーシャル・キャピタルとスティグマに関連して、統合失調症の回復、精神科リハビリテーションの知見、主体的な回復を支えるアプローチの考察を、第21回認知神経学会学術集会で発表した。

前回科研の成果の一部である、統合失調症の回復に対する職種による捉え方の違いを、8th International Conference on Social Work in Health and Mental Healthで発表した。回復について、看護師は病状や言動の変化を、他職種は患者の内面の変化や力がつくこと、生活の立て直しと捉えていた。一つひとつの回復の積み重ねが回復であり、段階的に進むとの見方はどの職種も共通していた。また、看護師は院内寛解を社会参加の一つとしていたが、他職種は地域社会でどう生きるかを患者が自覚することを重要視していた。一般の人々として、ダウン症の子の親の

会に所属する母親の精神障害者に対する偏見を、18th International Mental Health Conference で発表した。ダウン症の子の母親は、知的障害と精神障害との違い、ネガティブな精神障害者像、閉鎖的な精神病院のイメージをもち、精神障害の偏見がなくなることはないと考えていた。

台湾の精神医療福祉について、精神障害とリハビリテーション誌にて紹介した。台湾の精神医療の歴史と制度、クラブハウスと就労支援施設の概要、利用者とスタッフの声を紹介した。

ダウン症の子の親の会に所属する母親が、精神疾患・障害をどのように捉えているのかを、日本健康医学会雑誌にて発表した。母親らがもつ精神障害者像は、障害を有する者がいない家族を含めた一般の人々と大きく変わらず、精神障害者に親密さをもてず、偏見の払拭は容易でないことが明らかになった。また、わが子を隠さない態度は精神疾患を有する子の母親とは異なり、これはダウン症と精神疾患に併存する障害の質や養育方向の違いによるものと考えられた。

統合失調症患者・専門職・一般の人々の面接内容を質的に分析した。患者は、マスコミと精神障害者が関与した事件が世間に与える影響、健常者との間にある一線、自分に対する周りの否定的な視線と偏見、他の障害との違いを意識していた。専門職は、業務の一環とわりきった姿勢、精神疾患を理解することの限界、自身の倫理観にまつわる疑問をもち、一般の人々は、疾患による回復の可否、精神障害者に対する距離、精神疾患を真に理解することはできないと考えていた。尚、子育て支援事業所属のボランティア対象の面接内容の分析結果を、2018年度中に精神保健看護領域の学会もしくは学術誌で発表予定。

統合失調症患者・専門職・一般の人々のLinkスティグマ尺度、ソーシャル・キャピタル質問紙の得点を解析した結果、三者間でスティグマ平均総得点に有意差は認められず、12設問中6つについて専門職の得点が最も高かった、即ち当該項目のスティグマが高かった。専門職では、精神科経験のみの者が他科経験ありの者よりも、「ベビーシッター雇用に関するスティグマ」が有意に高く($p<0.05$)、「知的に関するスティグマ」は患者よりも有意に高く($p<0.05$)、「軽視に関するスティグマ」は一般よりも有意に高かった($p<0.05$)。また、専門職と一般男性は全員、何らかの地区組織へ参加し、地域の人々への信頼性と互酬性が高い傾向であった。

本研究の計画から準備、実施、完了に至る流れを整理し、成果報告書として冊子を作成した。

<引用文献>

1) Jenkins JH, et al, Stigma despite recovery: Strategies for living in the aftermath of psychosis, Medical

Anthropology Quarterly, 22, 381-409, 2008
2) Henderson CM, et al, Stigma and discrimination in mental illness: Time to change, Lancet, 373, 1928-1930, 2009

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

水野恵理子, 坂井郁恵, 高田谷久美子, 岩崎みすず, ダウン症候群の子どもをもつ母親が捉える精神障害者, 日本健康医学会雑誌, 印刷中, 査読有

水野恵理子, 精神障害からの主体的回復とリハビリテーション, 認知神経科学, 19(1), 26-32, 2017, 査読無
DOI: <https://doi.org/10.11253/ninchishinkeikagaku.19.26>

水野恵理子, 台湾の精神医療福祉, 精神障害とリハビリテーション, 21(2), 210-214, 2017, 査読無
<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021413380/>

〔学会発表〕(計3件)

水野恵理子, シンポジウム 認知神経科学によるフィールドアプローチ-障害児者の早期発見と介入の試み-, 精神障害からの主体的回復とリハビリテーション, 第21回認知神経科学学会学術集会, 2016年8月6~7日, 東京
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ninchishinkeikagaku/19/1/19_26/_pdf

Mizuno E, Iwasaki M, Sakai I, Kamizawa N, Survey on experts' understanding of schizophrenia recovery, 8th International Conference on Social Work in Health and Mental Health, June 19-23, 2016, シンガポール

Mizuno E, Sakai I, Takataya K, Iwasaki M, Conceptions of mental disabilities of mothers of children with Down syndrome, 18th International Mental Health Conference, August 21-23, 2017, オーストラリア

〔その他〕

ホームページ等
山梨大学研究者総覧
<http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/322/0032115/profile.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

水野 恵理子 (MIZUNO, Eriko)
山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：40327979

(2)研究分担者

岩崎 みすず (IWASAKI, Misuzu)
飯田女子短期大学・看護学科・教授
研究者番号：00461872

(4)研究協力者

坂井 郁恵 (SAKAI, Ikue)
山梨大学・大学院総合研究部・助教

山崎 洋子 (YAMAZAKI, Yoko)
健康科学大学・看護学科・教授